

四例デハ平均十ヶ月ヲ經過シ胃腸吻合術及試験開腹術即チ切除シ得ナカツタニ〇例デ見ルト九、六ヶ月經過シテ居リマス。切除ノ出來ル出來ヌノ境界ハ僅カニ二ヶ月前後デアルカラ時期ノ問題ガ胃癌ノ永久治癒率ニ向ツテ如何ニ重大ナ關係ヲ持ツテ居ルコトハ明カデアリマス。

完全ナル腫瘍除去ハ唯初期ニ手術ノ決行セラレル時ニ於テノミ其ノ目的ヲ達スルコトガ出來手術ノ早イ程成績ガヨイノデアリマス。然シ胃癌ノ早期ニ於ケル確診ハ只開腹術ニヨル直接診査ヲ以テ初メテ可能デアル場合ガ多イカラ胃癌ト云フ確徵ガナクテモ充分コレヲ疑フニ足ル理由アル時ハナルベク早ク診斷的開腹術ヲ施スベキデアリ、斯クシテ胃癌ト云フ確診ノツイタ時ハ重症ナ合併症ノナイ限リ直チニ其ノ場デ胃癌ニ對スル手術ヲ施スコトガ出來ルカラ最も都合ガヨイノデアリマス。

原發性肋膜腫瘍標本供覽

金澤醫科大學病理學教室(主任中村教授)

茶 谷 良

此處ニ供覽致シマス所ノ標本ハ、大工ヲ業トスル五十七歳ノ男子ニ見ラレタモノデアリマスガ、先ヅ其ノ臨床上所見ノ主ナルモノヲ舉ゲマスト、(一)、約一ヶ年半許リ前カラ全身倦怠ガアツテ爲ニ仕事モ出來ナカツタコト、(二)、二ヶ月許リ前カラ認ムベキ原因ナクシテ咳嗽、喀痰、呼吸困難アリ且ツ尿量減少、浮腫ヲ來シタコト、(三)、胸部ハ右側上葉ノ上部ニ相當スル部ノ外全ク濁音ヲ呈シ心尖音ハ右側第三肋間ニ聽カレタコト、(四)、胸腔穿刺液ハ殊ニ左側ニ於テ純血性デアツタコト、(五)、無熱デアツタコト等デアリマス。而シテ縱隔竇腫瘍？並ニ腎臟炎ノ診斷ノモトニ鬼籍ニ入り解剖ニ附セラレタ例デアリマス。

所デ解剖上ニ見ラレマシタ最も重要ナル變ハ左側肋膜腔ニアツタノデアリマシテ、御覽ノ通り該胸腔ハ一大空洞ヲ

ナシ内ニ約四「リ―テル」ノ汚穢暗赤色ニシテ一部泥狀ノ物質ヲ混ヘタル液ヲ容レテキマシタ。爲ニ左側肺臟ハ壓迫セラレ斯様ニ強ク萎小シテ無氣肺ノ狀ニアルノデアリマス。而シテ肋膜ハ殊ニ體壁板ニ於テ一般ニ著明ニ灰白色乃至膠樣灰白色ニ肥厚シ且ツ所々大小ノ結節ヲ作ツテキマス、殊ニ胸腔上口部ニ最モ著シク其他ノ部ニ於テモ所々多少ノ度ニ乳嘴狀或ハ僅カニ絨毛狀觀ヲ呈スル部ヲ見ルノデアリマス。

ソコデ之等ノ部カラ作りマシタ組織標本ヲ御覽ニ入レマスト、新生組織ハ實質細胞ト間質トカラ成ツテキマシテ其ノ境界ハ一般ニ明カデアリマス。殊ニ胸腔上口部ニ於テハ上述肉眼上所見ニ一致シ樹枝狀ヲナシタ結締組織ノ基質ト之ヲ覆ヘル圓柱狀細胞ノ密ニ相並ンデ配列スルヲ見ルノデアリマシガ、該細胞ハ所ニヨリ一層ニ或ハ又多列性トナリ屢々核分割像ヲ認ムルノデアリマス。殊ニ注意スベキハカ、ル圓柱狀ノ細胞ガ亦他方ニ於テハ骰子形或ハ扁平ナル細胞ニ漸次相移行シテキル像デアリマス、而シテ此ノ扁平ナル細胞ハ其ノ形態ニ於テ肋膜表面ノ被覆細胞ト甚ダ相似タル性狀ヲ有スルノデアリマス。所デ斯クノ如ク表面ニ増殖セル細胞ハ亦肋膜ノ深部ニ向ツテモ不羈ナル増殖ヲ營ミ、不規則ナル腺管狀又ハ索狀胞巢狀等ヲナシテ組織間隙或ハ血管周圍等ノ淋巴管所ニヨリ血管内ニ侵入シテキルノデアリマス。然シナガラ之等ノ部ノ内皮細胞ト相移行スルガ如キ像ハ見出シマセン。間質ハ一般ニ核ニ乏シキ結締組織デアリマシテ所ニヨリ著シク血管ノ擴張充盈スルヲ見加之出血ヲ來シ或ハ僅カニ圓形細胞浸潤ヲ見ル部モアルノデアリマス。

上述ノ所見ヲ綜合シマスト此ノ肋膜面ヲ占メテキル新生組織ハ眞性腫瘍殊ニ其ノ惡性ナル癌腫様ノ造構ヲ有スルモノデアリマス。殊ニ前縱隔、頸部、腋窩、後腹膜、肝門部等ノ淋巴腺及肝腎ニ於テ同様ノ新生組織竈ヲ見ルノデアリマシテ之等ハ轉移性ニ發生シタモノト見テ誤ナキモノデアリマス。然ルニ無氣肺ノ狀ニアル左肺ノ剖面ニ於テモ亦蠶豆大灰白色ノ竈並ニ散在性ニ數個ノ小結節ヲ見ルノデアリマシガ何レモ同様ノ組織的像ヲ有スルモノデアリマス。而モ肺臟ハ亦可ナリニ癌發生ノ母地トナル臟器デアリマシカラシテ吾々ハ本例腫瘍ノ發生母地ヲ檢索スルニ當リ周到ナル注意ヲ要スルノデアリマス。而シテ私ガ今日マデ檢査致シマシタ範圍ニ於テハカ、ル竈ヲ以テ原發ナリトスル何等

確タル根據ヲ見出サズシテ寧ロ斯クノ如ク限局シタル小竈ハ種々ノ點ヨリ見テ續發性ノモノトスルノ却ツテ穩當ナルヲ考ヘマス。即チ全體ノ像カラ見テ肋膜ニ於テ腫瘍性變最モ強ク他ノ臟器ニ於テ確カニ原發ト認ムベキ腫瘍ヲ見出サナイノデアリマスカラシテ、本例ハ肋膜ニ原發シタモノト考ヘテヨイト思ヒマス。且ツ上述ノ如ク淋巴管或ハ組織間隙等ノ内皮細胞トハ何等親密ナル關係ヲ見ズシテ、却ツテ腫瘍細胞ト肋膜被覆細胞トノ間ニ密接ナル關係ガ存スルコトヲ考フルニ足ルベキ組織の所見等ガアルノデアリマスカラシテ本例ハ肋膜表面ノ被覆細胞カラ發生セルモノトシテ大過ナカルベシト信ジマス。而シテ斯クノ如キ例症ノ記載ハ今ヤ一二ニ止マラスノデアリマスガ屢々見ラルベキモノデハナイノデアリマス。

顱頂部肉腫ノ一治驗例

金澤醫科大學泉外科教室

砂 田 外 治

顱頂部ニ生ジタル巨態細胞肉腫ノ一治驗例ヲ報告スベシ。患者ハ三十四歳ノ男子ニシテ、顱頂部腫瘍ヲ主訴トセルモノヲ見ル。

昨年十二月上旬顱頂部ニ拇指頭大ノ柔軟ニシテ、壓痛ナキ腫瘍ヲ生ジ、何等著シキ障礙ナカリシモ、漸次増大スルヲ以テ本年三月二十五日泉外科ニ來ル。

現 症。

體格榮養佳良ノ男子、顱頂部ニ約鶏卵大ノ境界不明ニシテ皮膚ニ變化ナキ腫瘍ヲ認ム。觸診スルニ柔軟ニシテ搏動ヲ僅カニ認ム。骨緣ハ其ノ周圍一糲程距リタル所ニ認メ、腫瘍ヲ壓迫スルモ疼痛著シカラズ。且ツソレニ依リテ眩暈等ヲ起スコトナシ。